



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～



クマの棲める 豊かな森を 残すために

— 奥山自然林 保全・再生 —



クマは、日本の森のアンブレラ種。豊かな森の、あらゆる恩恵を受けて生きています。つまり、クマのすめる環境を残すということは、他の全ての生物が生息でき、保水力抜群の、一級の森を残すことになるのです。そして、この森によって私たち人間の生活や全産業が支えられています！



実践自然保護団体

くまもり

一般財団法人 日本熊森協会

全生物と人間・持続可能な農林漁業や工業のために、開発・拡大造林・地球温暖化・酸性雨などにより劣化した奥山を豊かな自然の森に再生する活動や、奥山水源域の原生的な森を買取り永久保全する活動（ナショナルトラスト）を、森の最大獣であるクマをシンボルに行っている、完全民間の実践自然保護団体です。

「動物たちに帰れる森を、地元の人たちに安心を！」

くまもり活動

野生動物たちがすすめる 豊かな森の再生活動

人工林の除去や混交林化

針葉樹人工林を皆伐除去したり、皮むき又はチェーンソーによる強度間伐で林内に日光を入れ、針広混交林化をはかります。



『皮むき間伐』（兵庫県宍粟市）

ナショナル・トラスト

わずかに残された、大型野生動物たちの生息地である奥山水源域の原生的な森を買い取って、手付かずで永久保全する活動です。2013年1月現在、全国12カ所、計1,944haを保全しています。

環境教育

森や動物の危機的な現状や、森と水の関係などを分かりやすく子どもたちに伝えます。

クマの絶滅防止活動

野生動物を殺さない国をめざして、地元や行政、議員に働きかけます。

●クマの狩猟・有害駆除・個体数調整殺害の原則禁止

●奥山放獣体制の完備

●電気柵や犬の追い払い等の防除を強化し殺さない対応

太郎と花子のファンクラブ

母グマを殺された2頭の孤児グマ、太郎（和歌山生れ）と花子（神奈川生れ）のお世話。

くまもり自然農

農薬・肥料などの化学物質や機械を使わず、生物多様性の保たれた持続可能な農に取り組み、自然に寄りそう生き方をめざします。



『草や虫たちと共に育った稲』

クマが人里に出てきたら…

- クマが出てきたことがわかれば夜間・早朝の外出を控えるか、外出は車にします。
- クマはとても臆病で怖がり。驚かさないように気をつけ、人身事故を防ぎましょう。
- クマは、柿やクリなどを食べ終えたら、山に戻ります。

山が異常凶作の年は、落ち果実などを与えましょう。

野生動物と人との
すみ分けライン！



奥山の現状

豊かな自然の森は、もはや国土の7%
戦後の国策により、奥山が高率で針葉樹の人工林に
残された自然林も急速に劣化、生物の棲めない森に

針葉樹の放置人工林

外から見るといいのですが・・・

スギ・ヒノキなど人工林の
7割は間伐不足もあり保水
力低下。林内には食べ物
がなく、動物たちが里へ出て
農作物被害を起こす。人工
林は山崩れや洪水を多発。
湧水激減など問題多し。

内部は暗く、実りも下草もなし
×生物は棲めない

山崩れ

洪水

人災

広葉樹の自然林

外から見るといいのですが・・・

ナラ枯れ

地球温暖化？酸性雨？

内部は下草が消滅
×生物は棲めない

シカの増加？増加原因不明

動物たちの水や食べ物が山にない



(奥山荒廃の第一次被害者は、野生動物たち)

食料を求めて山から出て来た動物たちにより、農作物被害が増大の一途

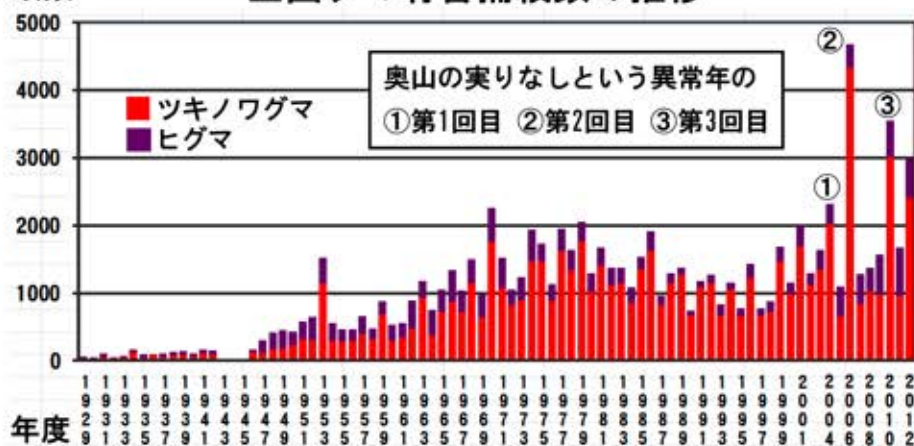
心をこめて育てた農作物を動物たちに食べられてしまう農家（奥山荒廃の第二次被害者）は、たまりません。

野生動物と人とのトラブルが、各地で起こっています。国が進めているのは、「有害獣駆除」や「個体数調整」名目による野生動物の大量捕殺という対症療法です。

ツキノワグマの有害捕殺数は、奥山の実りが大凶作だった2006年には全国で4679頭にもものぼりました。現在、国内における哺乳類の3割が絶滅の危機に瀕しており、大変な事態です。

頭数

全国クマ有害捕殺数の推移



推定生息数 ツキノワグマ8400～12600頭(1991年発表)・ヒグマ2000頭前後(2000年発表) ※環境省資料を基に当会作成、数の調整捕獲を含む。

奥山を保全・再生し、共存共生の道を！

野生動物をアウトドア感覚で殺し、ジビエ料理を楽しめとする現在の国の指導に、違和感を感じます。鳥獣被害対策として、十分な予防策（柵の設置等）をとると同時に、根本原因である人間による自然破壊をやめ、人間が一步下がり、戦後壊し過ぎた森や草原、湿地などを復元して、自然界が自力でバランスを取りもどすようにすべきです。人間に、複雑すぎる生態系のコントロールなど不可能です。

生物の多様性の上に、
豊かな水源の森が成り立っている！

原生の森

森＝植物＋動物＋微生物



21世紀も、水は森から

原生の森は、広葉樹の大きな根や大量の落葉、ふかふかの土壌によって、保水力抜群。台風や大雨にもびくともしません。野生動物・植物・昆虫・微生物など多種多様な生物たちの、絶妙なバランスの上に成り立っている豊かな水源の森が、私たち人間の生活や産業を守ってくれます。

石川県 白山ふもとトラスト地

昔のように動物たちとすみ分けて、共存をめざそう！

奥山に、広葉樹の自然の森を再生

自然林にもどすべきところ **5か所**

人工林はパッチ状に



日本熊森協会が提唱する、山地利用のグランドデザイン

ご入会案内

入会ハガキ・FAX・メールにてお申込みください

- ①会員種別 ②氏名(ふりがな)
③住所(郵便番号) ④生年月日 ⑤TEL/FAX
⑥Email ⑦ご職業 ⑧所属団体 ⑨ご入会動機

※ご入金確認後、入会手続きをとらせていただきます。

会費・ご寄付のお振込先

ゆうちょ銀行： 振替口座 (口座名) 熊森基金
00970-8-137360

三井住友銀行： 西宮支店 普通 8558663
(口座名) 一般財団法人 日本熊森協会

個人会員 ※ご入会次年度以降は、1月に、会費一斉納入をお願いしております。	
①正会員	年会費 6千円以上 (学生半額) 年4回会報送付 <u>※ご入会年のみ月割納入も可能です。</u>
②応援会員	以下A～Dより、毎年ご自由にお選びください。年4回会報送付 A) 5万円以上 B) 3万円以上 C) 1万円以上 D) 1000円以上
③特別会員	年会費 10万円以上 特別会員特典あり。年4回会報送付
④家族会員	会員①～③の同居家族は会費不要
法人会員 ※ご入会は事務局迄お問合せ下さい。	
①企業会員(年会費6万円) ②団体会員(年会費3万円)	



ご寄付・遺贈を受け付けております。野生動物や豊かな水源の森保全・再生活動にご支援ください。

一般財団法人 日本熊森協会 (1997年設立)

会員20,000名 23都府県に支部地区 (2013年12月現在)

【本部事務局】〒662-0042 兵庫県西宮市分銅町1-4

電話 0798-22-4190 FAX 0798-22-4196

ホームページ <http://kumamori.org>



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～

日本熊森協会とは

全生物のため、人のため、次世代のために、
クマなどの大型野生動物が棲む奥山水源の森の再生に取り組む
わが国で唯一の全国組織の実践自然保護団体です

わたしたちは完全民間団体として、地元の人たちと力を合わせ、「動物たちに帰れる森を、地元の人たちに安心を」の合言葉のもと、植え過ぎた人工林の除去や間伐に取り組み、奥山に自然林を再生して動物たちが帰れるようにし、殺さない鳥獣被害問題の解決をめざしています。

このような取り組みは、地元の方や野生鳥獣のためだけではなく、野生鳥獣が造る最高に豊かな水源の森を、都市市民の水道水確保のために未来永劫に保全したことになります。



くまもりの基本理念

- 地球は人間だけのものではない（全生物に生存権がある）
- 地球環境の保全なくして人類に未来なし
- 全生物の生命尊厳文明を広めることが地球環境を保全する
「他生物にもやさしい文明が一番優れている」
- 人間が生態系を管理することは不可能
(管理したつもりが破壊している。生物の多様性だけが生態系を保全する)

●日本熊森協会ホームページ

実践自然保護団体：日本熊森協会 (kumamori.org)



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～

活動紹介

奥山生態系保全・再生

当協会は、奥山を保全・再生・聖域化し、

(1) 水源の森確保

(2) 棲み分けによる、クマなどの大型
野生動物との共存

(3) 野生鳥獣による農作物被害の軽減

をめざして活動している、完全民間の実践自然保護団体です。

この地球は、人間だけのものではありません

現在、新たな国策「森林・林業再生プラン」が施行されています。しかし、この事業は残念ながら、日本の山を経済対象としてしか見ていません。当協会は、昔のように、人が利用する部分と、手付かずで保全する部分とに、山をゾーニング（区分け）した上で、

- ① 奥山全域
- ② 尾根筋
- ③ 山の上 3 分の 1
- ④ 急斜面
- ⑤ 川筋

は、自然林に戻して、手付かずで保全すべきだと考えます。

日本熊森協会が提唱する 山地利用のランドデザイン

● 自然林にもどすべきところ
▲ 人工林はパッチ状に

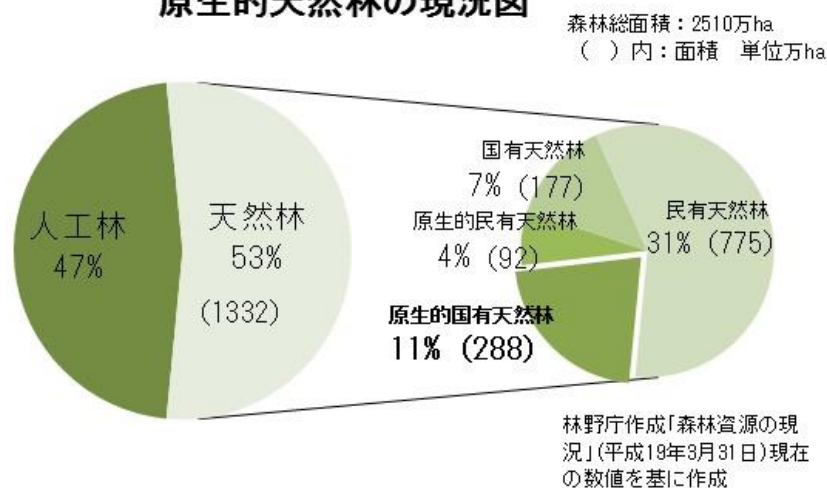


我が国の森林の現状

戦後、わが国で伐採された 奥山の原生的天然林の面積は、東北 6 県分の面積に相当する広大さです。そこはクマなど森の動物たちが暮らす国でしたが、我が国は、そこを含む 1,000 万ヘクタール（全森林面積の 4 割）を人工林に変えてしまいました。その後、安い輸入材が入ってきて国内林業が成り立たなくなると放置され、現在、広大な人工林の 内部は荒れ果て、動物たちが棲めなくなっています。



原生的天然林の現況図



(渡部康人：「林野庁による国有天然林破壊の歴史と現状」第5回くまもり東京シンポジウム 2011 より)

当協会の活動

当協会は、「動物たちに帰れる森を、地元の人たちに安心を」の言葉のもと、さまざまな方法で、動物が棲める針広混交の森の自然再生に取り組んでいます。そして、食料を求め山奥から出て集落周辺に棲みつかざるを得なくなっている野生動物たちを奥山に誘導し、地元農家の皆さんの農作物被害を軽減させようとしています。具体的には、放置された人工林のスギ・ヒノキを強度に間伐（皮むき・ノコギリ・チェーンソーを使用）して林内に日光を入れる「強度間伐」、「実のなる木の植樹」、「山への炭まき」などの方法が挙げられます。

その他、「クマなど野生動物の保全・調査活動」、「環境教育」、「講演・各種啓発活動」、他生物と共存する生き方を学ぶための「自然農」、「親を亡くしたクマの保護飼育」、「外来生物問題への取り組み」など、関連する多くの活動に取り組んでいます。現在、本部のほか支部・地区のある地域で、市民によるボランティア活動として実施中です。

日本熊森協会の基本的な考え方

《自然とは》

長い年月の間、風化により山は削られ、土砂は流され、川の流れは変化し、湿地ができ、消え、森林を形成する植物相も動物数もどんどんと変化していく。刻一刻と変遷し続けていくもの。それが自然です。自然とは人間が手をつけていないものです。この自然の大きな流れの中で、生かされているのが私たち人間なのです。

《自然を守るとは》

人間が自然に手を加えれば、絶妙なバランスの上に成り立っている自然の生態系は壊れていきます。自然を壊すのは唯一地球上で人間だけです。自然を守ることは簡単です。人間が一步引いて、手付かずの部分を残せばいいのです。人間による自然の利用を必要最低限にとどめ、それ以外の部分は手付かずで残す。それが私たちの祖先が実践してきた最良かつ唯一の方法です。一度バランスが崩れた自然を元に戻すには、自然の力に任せるしかありません。人間が自分の都合のいいように自然を保護したり管理したりしようとすることは、自然保護とは言えません。

《動物＋植物＝森　クマは豊かな森のシンボルです》

自然界は種々雑多な動植物が生態系のなかで絶妙のバランスを保ちながら共存しています。1種類でも生物が欠けると生態系のバランスはたちまち崩れ、森は劣化していきます。野生動物もまた、森の形成に多大な貢献をしています。動物がいなくては、森は森になりません。クマは日本最大の大型獣であり、自然界のあらゆる恩恵を受けて生きています。つまり、クマの棲める環境を残すということは、他の全ての生物が生息可能な豊かな自然を守ることにほかなりません。

《自然保護は、若い世代が先頭にたって取り組むことが必要です》

環境問題に取り組むということは、社会の未来を守ることであり、社会を受け継ぎ、次の日本をつくっていく若い世代が先頭に立って取り組むことが必要です。日本熊森協会には、自分以外の者のために、必死でがんばることのできる若いリーダーたちがたくさんいます。明日の日本のため、真剣に自然保護に取り組む若い世代を、私たちは応援します。

《他生物の命を尊重するやさしい心が、自然を守ります》

自然保護の原点は、自分以外のもののことも考え、共に生きていこうとするやさしい心です。どれだけ、知識や技術があっても、それだけでは自然を守ることはできません。知識や技術だけでは、自己のみのことを考え、他のものを犠牲にして突き進もうとする欲望を抑えきれないからです。「かわいそう」という気持ちのみでは自然保護はできませんが、自然や他生物を尊重する心のない人にも、やはり自然保護はできません。



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～

日本熊森協会・和歌山県支部の活動

1. ツキノワグマ太郎ちゃんのお世話



太郎ちゃんは 1990 年 和歌山県有田郡清水町生まれ。生後2ヵ月の時に母を射殺され、孤児になりました。和歌山県鳥獣保護連絡会会長（当時）の東山省三氏が、県からの依頼を受け、体重500g の太郎を大切に育てることになりました。大きくなった後の行き場がなくなって困っていたところ、生石の山田氏が引き取りを申し出て下さりました。東山氏の強い要望で、ふるさとが見える生石高原に、県が2頭分の獣舎を建設し

てくれて 1992 年から山田氏が飼育して下さいます。

日本熊森協会は2005年に「太郎と花子ファンクラブ」を結成し、山田氏をお手伝いするカタチで保護飼育しています。

和歌山県支部では毎月第1、3日曜日、および平日（不定期）の1日に太郎ちゃんのお世話（獣舎の掃除、エサやり）を担当しています。和歌山および近隣府県の方で、応援して下さる方は、和歌山連絡所 TEL 090-7967-7585 までご連絡ください。



2. 放置人工林の広葉樹林化、自然環境保護、生物多様性の復元・保全

3. 和歌山県自然環境室との連携

和歌山県では誤って捕獲されたツキノワグマは、必ず奥山へ放獣されることになっています。その際には和歌山県自然環境室から日本熊森協会・和歌山県支部へ報告して頂いています。

4. 会報「熊森わかやま通信」の発行（4回/年）

県内の会員の皆さまに支部の活動をお伝えします。



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～

看板をリニューアル！



（この看板は太郎ちゃん、花子ちゃんの獣舎への進入路入口にあります）

看板のデザインは、田辺市で活躍されているグラフィックデザイナー
竹林陽子さん（京都府綾部市出身）に依頼しました

竹林さんがこのデザインに込めた想いは

『植生豊かな森そこに暮らす熊たちと
それを守りたいという子どもたちや大人たちに想いを馳せ
絵本のような柔らかいタッチでカラフルな絵にしました』

ぜひ、太郎ちゃんに会いに
そして、この素敵な看板を見に、生石高原へ足を運んでください

花子ちゃんは平成30年に永眠したのですが
長年、花子ちゃんのお世話をされてきた皆さんの心の中で、ずっと花子ちゃんは生きています
その想いから花子ちゃんの名前も看板に残すことにしました



一般社団法人 実践自然保護団体

日本熊森協会

～クマたちの棲む豊かな森を次世代に～

熊森協会の誕生に「みなべ」が関係？

実は、みなべ町は、日本熊森協会の活動が生まれるきっかけとなった重要な町なのです。

1992年1月に、現在の和歌山県南部川村（現みなべ町）清川で、やせてガリガリのツキノワグマが山から出てきて捕殺されました。この新聞記事を見て、熊森の前身である兵庫県尼崎市の中学生たちが、クマの絶滅を止めようと動き出したという経緯があります。

みなべ町で、ニホンミツバチやクマをシンボルに豊かな森再生の動きが始まろうとしていることに、何か運命的なものを感じます。

（くまもり NEWS「みなべ町で環境シンポジウム開催」～室谷会長）

享月 日 第 号 (夕刊)

1992年(平成4年)1月14日 火曜日 39674号 (日刊)

オラこんな山いやだ

雑木消え腹ぺこ眠れぬ 真冬なのに里へ…射殺

冬眠に入っているはずのツキノワグマが、食べ物やねぐらを求めて里に下りて来るケースが目立つ。和歌山県ではつい一週間で、お年寄りが襲われて重傷を負った。梅雨さきの長雨や台風の影響で木の葉が不作だったうえ、山奥まで雑木が進み、「食」と「住」の両面で追い立てられているよう。深い山林が少なくなくなった西日本では絶滅の危機にある、と指摘する声もある。人里にまで姿を見せるクマは、必死になって「環境破壊」へのシグナルを送っているといえる。

今月6日、二十五年前にクマが射殺された和歌山県南部川村は、かつてバメガシなどの雑木林が山間部に広がっていた。クマの好物のドングリがなるが、ウバメガシは特産の紀州備長炭の原料でもあり、つぎつぎに伐採された。山間部ではスギ、ヒノキの植林が進み、人工林率は八〇%近い。冬眠に入らなクマは、カシ類に実る木の実(ドングリ)をたづねて腹を膨らめ、射殺されたクマは体長一メートル、この時期なら

冬眠に入っているはずのツキノワグマが、食べ物やねぐらを求めて里に下りて来るケースが目立つ。和歌山県ではつい一週間で、お年寄りが襲われて重傷を負った。梅雨さきの長雨や台風の影響で木の葉が不作だったうえ、山奥まで雑木が進み、「食」と「住」の両面で追い立てられているよう。深い山林が少なくなくなった西日本では絶滅の危機にある、と指摘する声もある。人里にまで姿を見せるクマは、必死になって「環境破壊」へのシグナルを送っているといえる。

ツキノワグマ 環境破壊に悲鳴



人里に下りてきて射殺されたツキノワグマ。体重40%にやせていた。＝6日、和歌山県日高郡南部川村で

一日、町のお年寄りを襲ったクマがオリにやっていた。翌日には一カ所どころでクマが襲われている。福井県の奥越地方を管内に持つ大野氏は去年十月、クマの「出動簿」を作った。例年一、二件しかないクマの目撃情報が、十月になって相次いだため、二カ月でこれまでの二十倍近く、一、二件が記入された。「ふつうなら冬眠に入っているはず。食べ物が不足して、根元の穴をねぐらにする。大木が少なくなると、本来の習性で狂ってきただけ」と、島根県野生生物研究

新ラウンド

合意案

川内、ウルクアイ・ラウン ド(フット)の新多角貿易 交渉は、十三日再開された。島根県河内町の調査で、クマがカシの実を食べよう と人家近くまで来ているのを確認した。隣の加計町では、十二月初め、三頭のクマが相次いで射止められた。九〇の大物、あとの二頭は親子で、この時期にこれだけのクマが射殺されたのは十年來の出来事だった。兵庫県岡崎町でも同様に、冬眠期の導入に反対を表明

朝日新聞

朝日新聞大阪本社
大阪府大阪市東区中之島3-1-1
電話 06-231-0131 平330-11
©朝日新聞大阪本社1992

東洋不動産への
道は、
いい住まいへの
近道です。

MORE
東洋不動産
本社 06(251)2471
東京本社 03(3502)8471
品 東洋不動産販売関西
06(251)8531代

きょうの紙面
3面



熊森わがやま通信

日本熊森協会 和歌山県支部 和歌山県日高郡みなべ町東本庄 1298 番地



新役員のご紹介

日本熊森協会・和歌山県支部の
会員の皆さま、こんにちは。

令和2年8月1日より県支部の役員体制が変わりましたのでお知らせいたします。

【新役員】

● 支部長兼会計

真造賢二（みなべ町）
しんぞう

● 副支部長

澤 信二（紀美野町）

● 顧問

北野久美子（和歌山市）

以上の体制で支部活動を行ってまいります、これまで同様に協力をお願いします。

★ 会報の発行

新体制になったのをきっかけに新たに会報「熊森わがやま通信」を発行することになりました。本部から定期的に発行されている「熊森通信」に同梱して貰うカタチで皆さんのお手元にお届けしてまいります。

京都支部の皆さまと太郎ちゃんのお世話



京都支部の皆さんと一緒に

8月2日に京都支部の皆さんと一緒に太郎ちゃんのお世話をしました。

この日は京都支部が担当の日で、5名の方が遠方より来て下さり、獣舎の掃除、餌やり等をしてくれました。

和歌山県支部から9名が参加し、周辺の草刈、藤棚の剪定、入口看板の修理等を行いました。

10日前に麻酔をして爪切りをした太郎ちゃんも元気に回復しており安心しました。

太郎ちゃんの爪切り



麻酔の前の太郎ちゃん

7月24日に太郎ちゃんの爪切り作業を行いました。一連の作業は千川獣医にして頂き、本部3名、支部4名が作業の補助をしながらその様子を見守りました。

画像にあるように巻き爪の状態は酷く、爪が食い込んで痛いのでしょうか、普通に歩けない状態にあり、この作業をすることになりました。

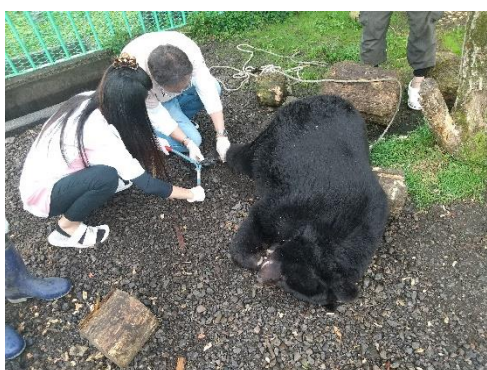


巻き爪の様子

まずは麻酔を打つところから始めたのですが、いつもと違う雰囲気太郎ちゃんは興奮気味で、なかなか麻酔を打たせてくれません。2時間近く掛かり、ようやく眠ってくれました。

2年前にも同様の作業をしたとのことですが、高齢のため動きまわることが少なくなり、こんなに早く爪が伸びたのかも知れません。

この画像にもあるように爪切りは何と番線切りで行いました。この様子は本部の方でビデオ撮影してくれており、同様の作業をする場合の参考にして頂けるはずです。



爪切り作業

全国支部地区長研修会



研修会参加メンバーでの記念

7月17、18日、滋賀県高島市安曇川にて全国支部地区長研修会に真造が参加いたしました。

全国から地区長、支部長21名が一同に介しての研修会でした。またコロナ感染症の渦中ということもあり、東京および近隣県からはズーム会議というかたちでの参加でした。本部からは室谷会長はじめ7名の参加です。

(研修概要)

●クマとの共存を考える

- ・放獣体制をつくろう
- ・南魚沼で保護した子熊の放獣
- ・石川県クマ子ちゃんの報告
- ・共存のための今後の活動
- ・クマ署名

●ゆたかな森づくり

- ・室谷会長講演
- ・森林環境護与税の動き
- ・（愛知、長野、和歌山）

●嘉田由紀子顧問講演

「地球温暖化による豪雨災害

組織拡大・会員拡大

・コロナ後の活動や会員拡大

・SNSを活用した広報

・ズーム等の活用

●トキノキの生態・環境教育

●今後半年の支部活動布告



研修会の様子



琵琶湖畔の嘉田先生の自宅前にて

★この研修をとおして

毎年、全国で約6000頭の熊が殺処分されている事実には心が痛みました。全国から声を上げ阻止していかねければなりません。

また動画で紹介された南魚沼で保護した子熊2頭を放獣するまでの行政との粘り強い折衝の様子には感動的でした。その他、各支部の様々な取組みには大いに刺激を受け参考になり、有意義な研修になりました。

この研修で発表した和歌山県支部の今後の活動方針

- ・太郎ちゃんのお世話
- ・植樹
- ・環境教育
- ・放置人工林の広葉樹林化
- ・既存の自然団体との協同
- ・自伐林業の推進（真造）

太郎ちゃんの看板

獣舎への進入路入口の看板の老朽化がひどいために新しく作り直すことにしました。

8月2日の作業時にその旨を提案し、皆さんに賛同して頂きました。また本部の同意も得ており、費用負担もして頂けます。



新支部長としてひと言

「この度、支部長に就任した真造賢二と申します。みなべ町在住で町議会議員、梅農家をしており現在58才です。

2年前に森山名誉会長の講演を初めて聞き、これこそライフワークと確信し、すぐに正会員に登録しました。

以降「森林環境税を活用して放置人工林の広葉樹林化」を一般質問、森山名誉会長、室谷会長を講師にお招きしみなべ町で講演会、環境シンポジウムを開催しました。

何分、正会員になり2年しか経っておらず、本会の活動がまだよく分っていません。北野顧問はじめ皆様のご指導を頂きながら支部活動を行ってまいります。何とぞご協力をよろしくお願い致します。」

★連絡先

何かありましたら真造までご連絡ください。

0907354-0552



素敵な看板ができました

太郎ちゃん、花子ちゃんの家看板をリニューアル

太郎ちゃん、花子ちゃんの家
舎への進入路入口にあった看板の老朽化がひどい状態にあったために新しく作り直し、11月13日に現地に設置しました。

看板のデザインは、田辺市で活躍されているグラフィックデザイナー・竹林陽子さん（京都府綾部市出身）に依頼しました。

彼女がこのデザインに込めた想いを紹介します。
『植生豊かな森
そこに暮らす熊たちと
それを守りたいという
子どもたちや
大人たちに
想いを馳せ
絵本のような
柔らかいタッチで
カラフルな絵にしました。』

看板設置

の作業中に
通りがかった
皆さまが笑
顔でこの看
板に見入って
ました。この
看板が生石
高原の新た
なアイコンと
して皆さま
に末永く親
しまれ、また
熊森活動が
好感を持って
認知されて
欲しいです。

竹林さん

の意図通り、とてもカラフルで
可愛い絵本のような看板です。
くまもり通信にカラー写真が
掲載されていますのでご確認
ください。ぜひ、太郎ちゃんに会
いに、そしてこの素敵な看板を
見に現地へ足を運んで下さい。



また花子ちゃんは平成30年に
永眠したのですが、長年、花子ち
ゃんのお世話をされてきた皆さ
んの心の中で、ずっと花子ちゃん
は生き続けています。その想いか
ら花子ちゃんの名前も看板に残
すことにしました。

今年最後の太郎ちゃんのお世話の後に皆さんでパチリ

県自然環境保全地域

和歌山県（自然環境室）では豊かな自然環境を乱開発から守り、後世に残そうという取り組みをされています。

支部長就任後、北野顧問と環境室にあいさつに行き、室長からこの県の取り組みを教えてくださいました。正に日本熊森協会の取り組みと合致しますし、県民として誇らしい取り組みです。

（真造）

【和歌山県自然環境保全地域】

和歌山県では、天然林などの現存する貴重な自然環境を保全するため、自然・社会的諸条件から見て自然環境を保全することが必要な特定の地域について、和歌山県自然環境保全条例に基づき、県自然環境保全地域として指定し、適正な保全に努めています。

- ・西ノ河原生林（日高川町）
- ・亀谷原生林（龍神村）
- ・琴の滝（すさみ町）
- ・静閑静（新宮市）等

広域での議員懇談会



（11月26日 田辺市）

熊森会員の笠松美奈さんの声掛けにより、地球温暖化防止について、広域での議員座談会があり参加しました。

和歌山県議員1名、田辺市議員4名、上富田町議員1名、みなべ町議員1名が出席しました。

ゴミやCO2排出量の削減、森林環境譲与税の活用、エネルギーの地産地消、行政のペーパーレス化。それらに自治体とし

てどう対応すべきか、できるか。気候非常事態宣言やゼロカーボンシティ表明の意義：…多岐にわたるテーマで有意義な時間でした。

今後もうこういう機会をつくり、広域で議論・協働しながら、具体的な取り組みに結びつけていきたいですネ。（真造）

広葉樹の植樹

（11月15日 みなべ町東本庄）

和歌山大学「クリエ」の7名の学生に南部高校「食と農園科」の生徒5名を加え、ウバメガシ、広葉樹の苗を植樹しました。



急斜面での植樹



左半分が植樹エリア 20アール

梅の放棄畑に日本ミツバチの蜜源となる広葉樹を植え、激減する日本ミツバチを復元することが目的です。もちろんウバメガシは備長炭の原料になります。日本ミツバチは梅の交配に非常に大事な存在で、その復元・保全は日本一の梅の産地を守ることにあります。（真造）

どんぐり拾って苗木に

（11月10日 みなべ町高城）

高城中学校の1年生がどんぐりを拾い、備長炭の原木であるウバメガシの苗木を育てて、植樹をしようという取り組みを始めました。2年後の3年生時に植樹する計画です。

校長先生のコメント「苗木ができれば、目に見えて取り組みのやりがいを感じられるし、うまく育てば、将来、自分たちが植えた木として誇れると思う。子どもたちがふるさとの山や森を大事にしていきたいという自発的な気持ちを育てられれば」

（真造）



どんぐりを洗っています

【和歌山県支部の活動予定】

太郎ちゃんのお世話は冬季間休止します。次回は令和3年3月7日です。

★連絡先

何かありましたら真造までご連絡ください。

090-7354-0552